

第2章 歯科口腔保健の現状と課題

ライフステージの歯科口腔保健について

人生の各段階における、主な歯科疾患や、口腔機能の発達についてまとめました。

ライフステージと歯科に関する主な疾患の関係

ライフステージ	乳幼児・学齢期		成人期	高齢期
対 象	未就園児	園 児 小学生 中学生	成 人 妊産婦	高齢者
	要支援・要介護者			
障がい児・者				
口腔機能	発達	発達・維持	維持・向上	低下予防
歯科に関する 主な疾患	乳歯むし歯		永久歯むし歯	
			歯周病	
	摂食嚥下機能障害			

乳幼児期

乳幼児期は健全な口腔機能発達の大切な時期です。口腔機能は離乳食を食べること等で発達するため、乳幼児に関わる周囲の大人が正しい知識を持ち、対応することが鍵となります。また、早い時期から罹患するむし歯を予防するためにも、周囲の大人がむし歯になりにくい生活習慣を身につけさせ、お口の管理をすることが重要です。

園児・学齢期

園児・学齢期は早期から発症するむし歯を予防することが大きな課題です。乳歯から永久歯への交換期であるこの時期は、口腔内が汚れやすく歯みがきも難しくなります。また、生えたての歯はむし歯になりやすいため、この時期に効果的な予防対策が必要です。

また、小学校高学年位から歯肉炎も増え始めます。将来的に歯を失う原因となる二大疾患のむし歯、歯周病を予防するために、学齢期から自律的に予防していく力を育てることも重要です。

成人期（妊産婦を含む）

成人期は歯周病を予防することが課題です。歯周病は40歳以上の約8割が罹患し、糖尿病や循環器疾患など全身疾患との関係も深い病気です。自覚症状が少なく、年齢とともに進行した歯周炎が顕在化していくため、歯科医院で定期的に検査を受け予防していくことが重要です。

妊娠期はホルモンバランスの変化やつわりなどにより口腔環境が悪化しやすく、歯科疾患のリスクが高まります。妊娠期に歯や口の健康に対する意識を高め、児や家族の健康につなげることも大切です。

高齢期

高齢期は口腔機能の低下を予防することが重要です。高齢者が食事をしっかり噛んで味わい、安全に飲み込むことは、栄養の確保だけでなく食べる楽しみや生きがいにも影響を与えます。

また、飲み込む機能の維持や、口腔内を清潔に保つことは、誤嚥性肺炎など様々な全身疾患の予防につながります。

要介護者等

要支援・要介護状態になると、口腔清掃が不十分になったり歯科受診が困難になるなど、口腔状態の悪化や口腔機能の低下が進みます。口腔機能の低下は低栄養・誤嚥性肺炎などの原因になり、食べる楽しみや生きがいにも大きな影響を与えます。そのため、専門職による口腔ケア・口腔機能の維持向上支援や、訪問歯科診療を充実させることが必要です。

障がい児・者

障がい児・者は、口腔清掃や口腔機能の維持、歯科治療が困難である場合があります。そのため専門的な口腔ケアや口腔機能への働きかけ等各々に合った支援や、歯科受診のための体制作りが必要です。

災害時の対応

災害発生後、衛生状態や生活環境の悪化により、むし歯・歯周病等の重症化、義歯の喪失、口腔内の不衛生による誤嚥性肺炎の発症等、様々な問題が懸念されます。適切で迅速な歯科保健医療の対応が必要です。



1. 乳幼児期

(1) 現在の取りくみ

【健全な口腔機能の発達やむし歯予防の知識の普及】

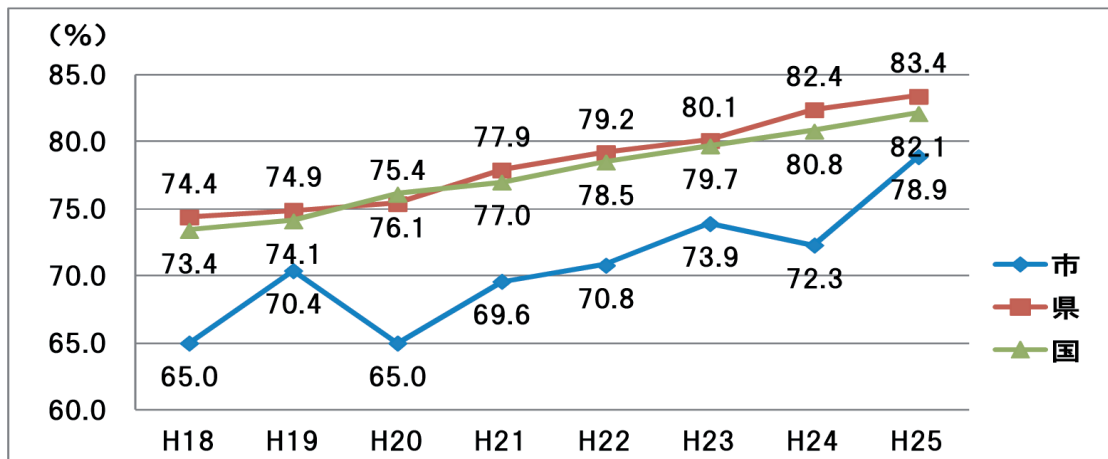
- ・ 妊婦教室、乳幼児健康診査、健康相談、各種教室、乳幼児相談、訪問歯科相談

(2) 現状

- 4 か月児健康診査や離乳食教室で、離乳食の開始や進め方・食べ方に不安を持つ親がいます。
- 10 か月児健康相談のおたすねで、児の食べ方について不安を持つ親が約70%います。
(H22 食育推進計画)
- 1歳6か月児健康診査で「むし歯のない者」の割合は97.4%です。
- 3歳児健康診査で「むし歯のない者」の割合は78.9%で全国・県より低い状況です。

3歳むし歯のない者の割合推移

(3歳児健康診査)



- 3歳児健康診査で、口唇閉鎖機能が弱いと思われる者がいます。
- 3歳児健康診査で、咬合異常が認められる者が16.5%います。(H25)
- 3歳児健康診査のおたすねで、食事について不安を持つ親が66.6%います。

3歳児健康診査で食事に不安を持つ親の割合

(H25 3歳児健康診査)

項目	割合
食べ方(偏食、小食、大食い、遊び食べ、ムラ食いなど)	55.6%
噛みかた、飲み込みかた	11.0%
合計	66.6%

(3) 課題

- 乳幼児期が口腔を健全に発達させる大事な時期ということを周知し、その時期にあった適切な支援が必要です。
- むし歯のない者をさらに増加させる必要があります。
- 歯科疾患予防のために、生活習慣の大切さについてさらなる啓蒙が必要です。

2. 園児・学齢期

(1) 現在の取り組み

園児【口腔機能の健全な発達、むし歯予防】

- ・ 保育園、幼稚園歯科健康診断 ・ 摂食相談
- ・ フッ化物洗口（年長児）、年長児保護者へ情報提供

学齢期【むし歯と歯周病の予防、口腔機能の健全な発達・維持】

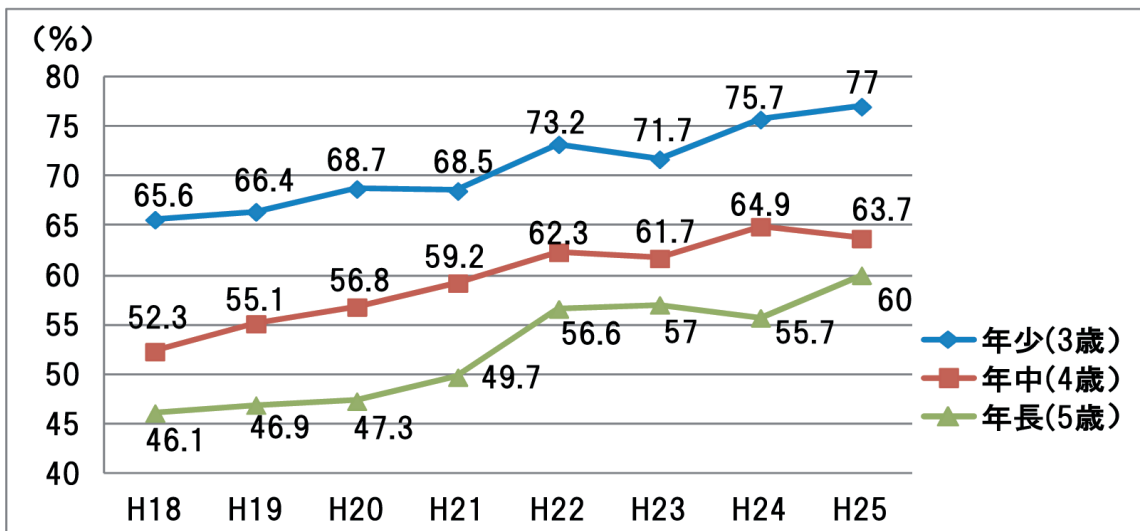
- ・ 学校歯科健康診断 ・ 歯科保健指導 ・ フッ化物洗口（小1～中3）

(2) 現状

- 保育園・幼稚園歯科健康診断で年長園児にむし歯がない者は60%です。（H25）

園児でむし歯のない者の推移

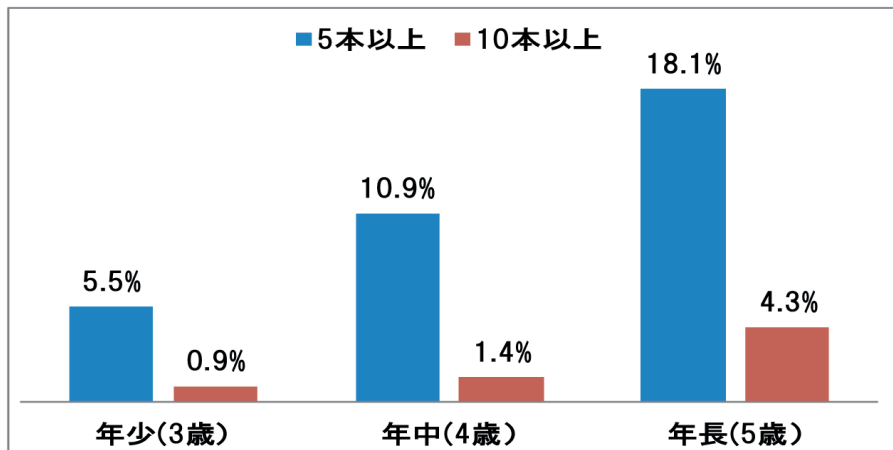
（保育園・幼稚園歯科健康診断）



- むし歯のない園児は経年的に増えていますが、1人で多数のむし歯をもつ者や受診につながらない要受診者がいます。

多数のむし歯を持つ園児の状況

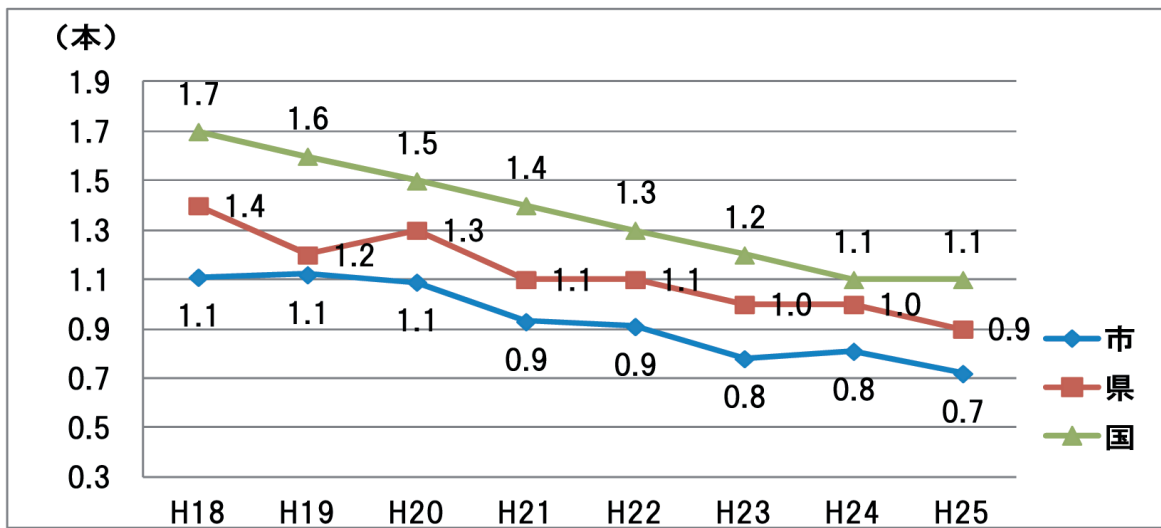
（H25 保育園・幼稚園歯科健康診断）



- 12 歳児における永久歯の一人平均むし歯数は、全国・県よりも少ない 0.7 本で、経年的に減少しています。 ※12 歳児は中学 1 年生をさします。

12 歳児永久歯一人当たり平均むし歯数推移

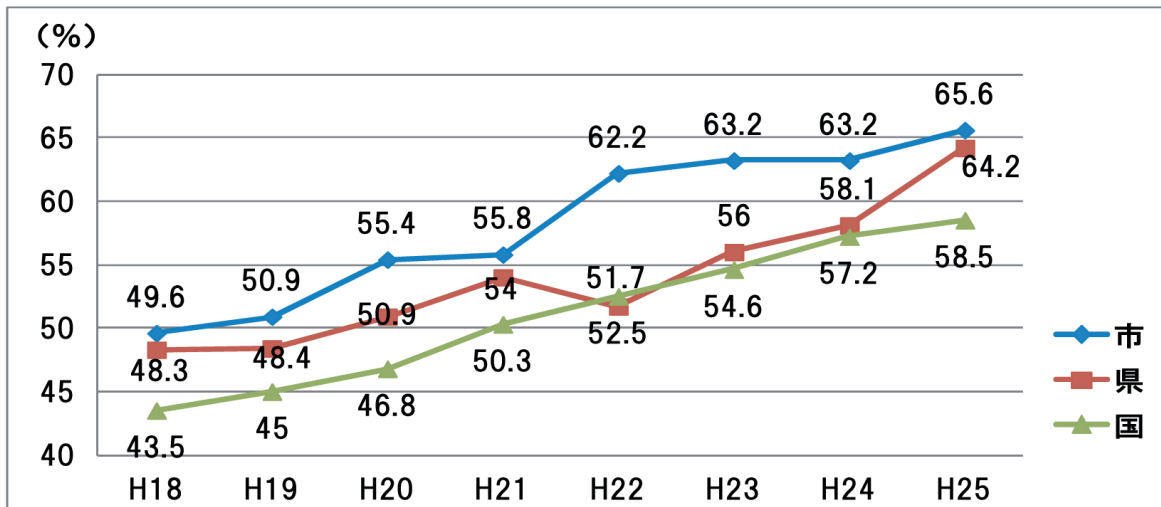
(学校保健統計)



- 12 歳児でむし歯のない者は 65.6%(H25)で、経年的に増加しています。

12 歳児むし歯のない者の割合推移

(学校保健統計)



- 平成 26 年度よりフッ化物洗口を全小中学校で開始しました。(20 幼保育園、10 小学校、7中学校)
- 12 歳児で歯肉に炎症が認められる者が 18.8%います。(H25 学校保健統計)
- 食べ方がうまくいかない、摂食嚥下に問題がある園児・児童生徒がいます。
- 生活アンケート(H24)で「噛みにくい物がある」と答えた児童(小5)が 48.6%います。
- 歯科保健指導の実施や内容などの実態が把握できていない学校があります。
- 態癖(歯や口腔組織に影響を及ぼす習癖)の影響が見られる園児・児童生徒がいます。

(3) 課題

- 歯科疾病予防のため、生活習慣の大切さについてのさらなる啓蒙が必要です。
- 一人で多数のむし歯を持つ者や受診につながらない者などに対する健康格差縮小対策が必要です。
- 正常に口腔機能を獲得できる者を増やすため、食べ方に不安のある園児の親や保育士などへ支援が必要です。
- 市内の小中学校・高校の歯科保健指導や口腔状況の詳細な把握ができていません。
- 自分の健康は自分で守る健康観の確立と歯みがき技術の向上が重要です。
- 健診結果をきちんと把握分析し、必要な情報を効果的に提供することが必要です。



3. 成人期（妊産婦を含む）

（1）現在の取り組み

【歯周病の予防、口腔機能維持・向上】

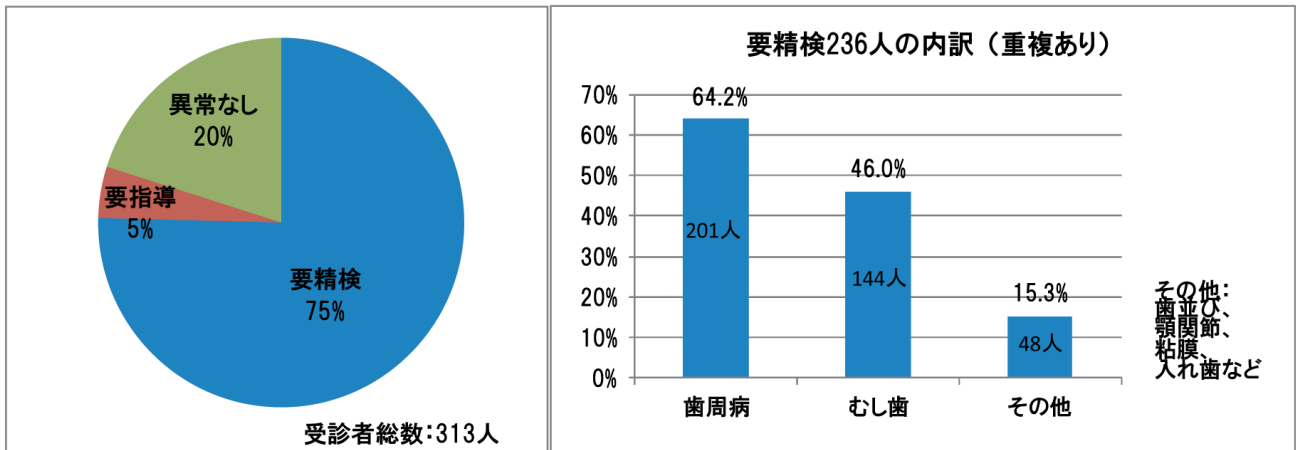
- ・成人歯科健診・歯科保健指導・親子歯科教室・訪問歯科相談

（2）現状

- 受診者の75%が要精検で、むし歯より歯周病に罹患している者が多いです。

成人歯科健診結果

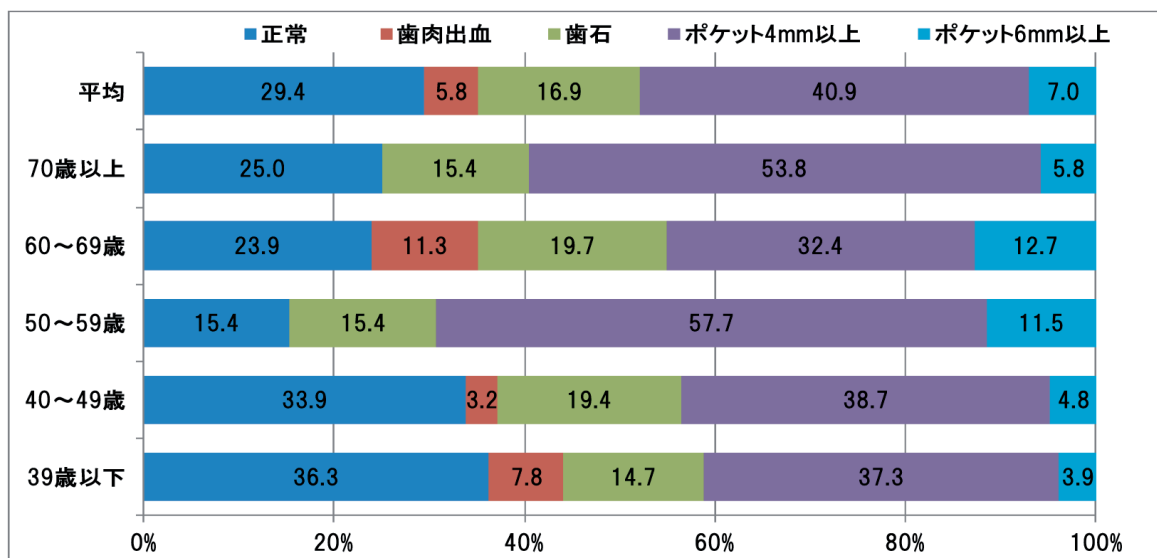
(H25 成人歯科健診)



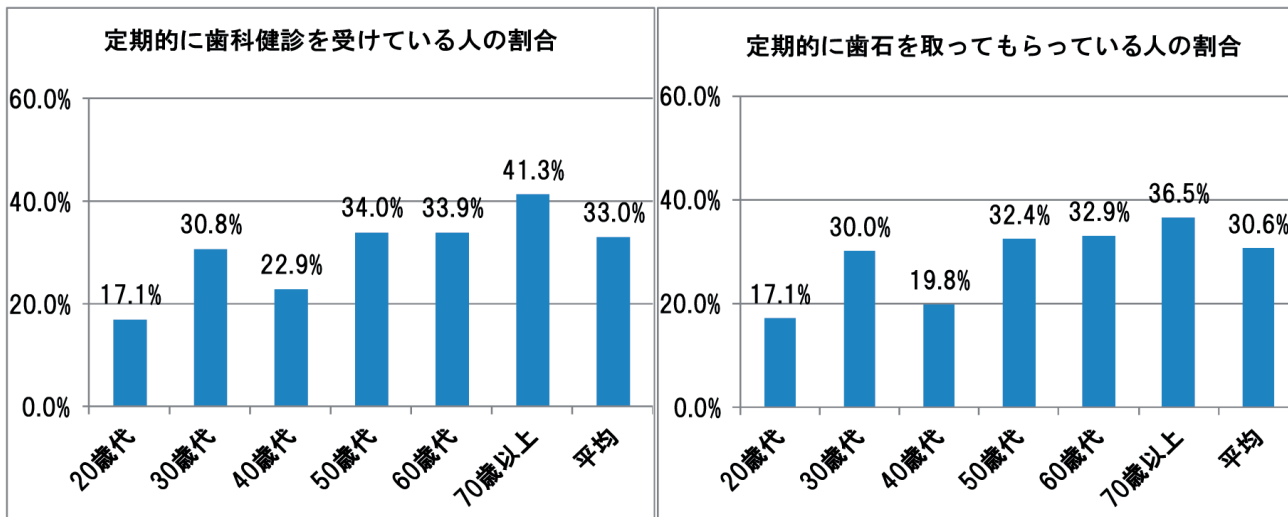
- 受診者の70.6%が歯周病に罹患しています。
- 全体の約50%が進行した歯周炎(4mm以上の歯周ポケット)であり、39歳以下の若年層においても約40%が進行した歯周炎に罹患しています。

年代別歯周病の状況

(H25 成人歯科健診)



- 親子歯科教室時、歯周病の唾液検査で陽性になる保護者が約3割います。(H25)
- 生活アンケート(H24)より、定期的に歯科健診を受けている者は33%、定期的に歯石を取ってもらっている人は30.6%います。年代別にみると20代・40代の受診率が低いです。



- むし歯や歯周病が進行してから歯科医院へ受診する者が多いです。
- 親子歯科教室時、「子どもを預けられず受診しにくい」と答える保護者が多くいます。
- 妊産婦の受診状況が把握できていません。
- 事業所における歯科保健の取り組みが把握できていません。
- 口腔機能について周知する機会が少ないです。
- 喫煙率は同規模市町村、県、国より低いものの、全体で10%以上の喫煙者がいます。
喫煙と歯周病は密接に関連しており、喫煙により歯周病が進行しやすいため、本人の禁煙もしくは周囲の受動喫煙対策が重要です。

喫煙率比較

(H25 特定健診問診)

安曇野市	同規模自治体平均	長野県	国
10.8%	13.0%	13.3%	14.0%

(3) 課題

- 成人（妊産婦を含む）の受診状況、口腔状況などを把握する必要があります。
- 歯周病が重症化する前の20代・30代へのアプローチが必要です。
- 歯科疾患の重症化を防ぐ必要があります。
- 定期的な歯科健診を受ける者を増やす必要があります。
- 歯・口の健康や、歯科治療について正しい知識を持つ妊婦を増やす必要があります。
- 働き盛りや子育て世代が歯科受診しやすい体制作りが必要です。
- 歯周病予防の観点から禁煙に取り組む必要があります。

4. 高齢期（要介護者等を含む）

（1）現在の取り組み

高齢者

【口腔機能低下予防の重要性、口腔清掃の必要性についての情報提供と知識の普及】

- ・ 高齢者歯科健康診査
- ・ 各種介護予防教室
- ・ 高齢者歯科相談窓口

要介護者等

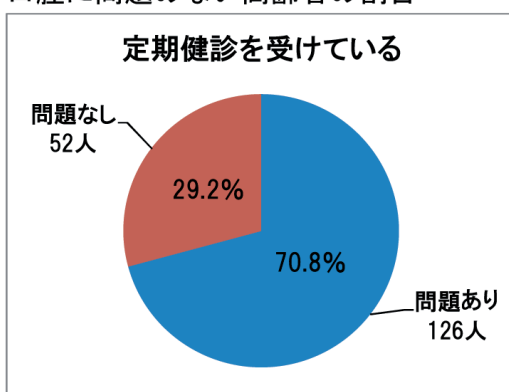
【歯科治療や口腔清掃、口腔機能の維持向上のための支援】

- ・ 高齢者歯科相談窓口

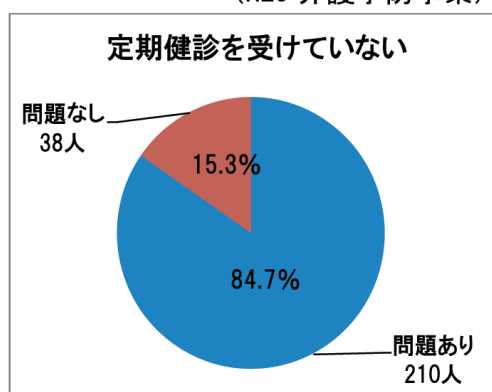
（2）現状

- 介護予防基本チェックリストの結果、65歳以上で口腔機能低下が認められる者の割合は19.1%です。（H25）
- 介護予防事業や出前講座において歯科集団指導、歯科個別相談を受けた者は693人で年々増加しています。（H25）
- 介護予防事業における歯科相談実施者の中で、定期歯科健診を受けている者の割合は41.8%です。
- 介護予防事業における歯科相談実施者426人のうち、定期歯科健診を受けている者は、受けていない者に比べ、口腔に問題のない者が多い状況です。（H25）

口腔に問題のない高齢者の割合



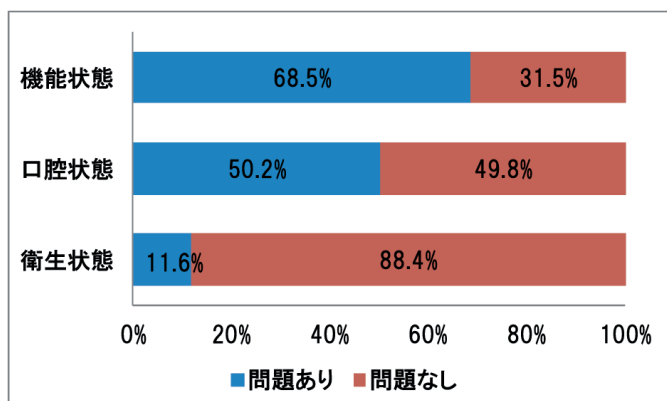
(H25 介護予防事業)



- 介護予防事業における歯科相談実施者の中で、衛生状態に問題のある者は少なく、口腔機能に問題のある者が多い状況です。（H25）

高齢者の口の状態

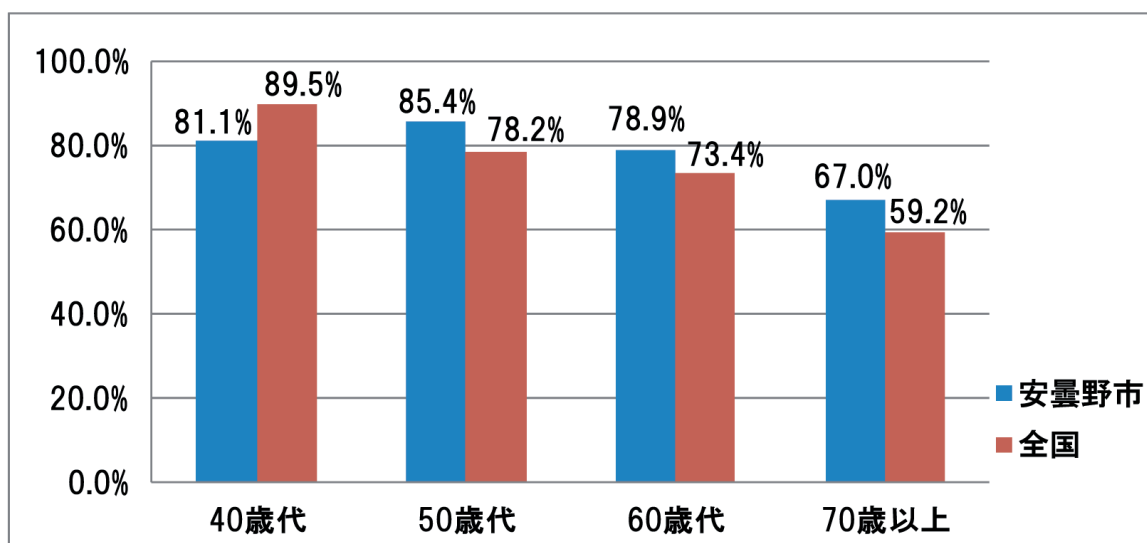
(H25 介護予防事業)



機能状態：噛む・飲み込むなどの口腔機能の状態
 口腔状態：歯や入れ歯の状態
 衛生状態：口のきれいさ

- 生活アンケート（H24）で、噛む・飲み込むことに特に問題を感じずに食事が出ると答えた者は、年齢が上がるほど減少しています。

噛む・飲み込むことに問題がないと答えた者の割合 (H24 生活アンケート)



- 介護予防事業の歯科相談結果から、むせるなど、口腔機能低下への問題意識のない者が多い状況です。
- 歯科治療、口腔清掃、口腔機能の維持向上が必要な要支援・要介護者に、支援が行き届いていないケースがあります。
- 関係者の口腔に関する認識に差があり、要支援・要介護者の口腔内状況を把握できていないケースがあります。

(3) 課題

- 市民への口腔機能に関する知識の普及がまだ十分ではありません。
- 歯科医院において、口腔機能低下の早期発見と予防に関する指導をさらに充実させる必要があります。
- 定期歯科健診の重要性について、広めていく必要があります。
- 要支援・要介護者に歯科治療、口腔清掃、口腔機能の維持向上の支援が必要です。
- ケアマネジャー等関係者への、口腔に関する知識の普及が必要です。
- 訪問歯科診療を充実させ、市民・関係者へ情報提供を行う必要があります。



5. 障がい児・者

(1) 現在の取り組み

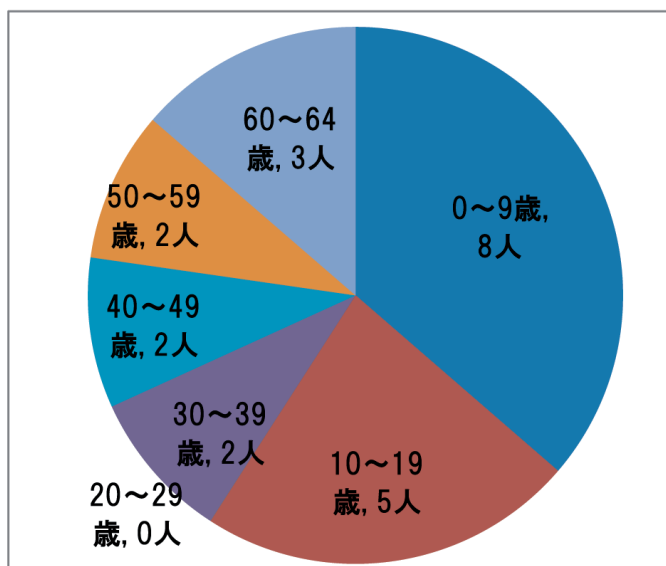
【歯科疾患予防、口腔機能の発達・維持・向上支援】

- ・訪問歯科指導

(2) 現状

- 歯科の支援が必要な者や、その口腔状況を把握できていません。
- 『重度心身障がい児(者)の健康を支える訪問歯科健診』(県事業)の利用者は 13 人です。(H25)
- 『訪問歯科指導』の利用者は 22 人で、延べ 186 件です。(H25)

歯科訪問指導年齢別利用者数 (H25)



- 障がい児・者の家族や関係者の、口腔に対する認識に差があります。

(3) 課題

- 歯科の支援が必要な者を把握することが必要です。
- 歯科治療や相談が受けられる体制づくりが必要です。
- 障がい児・者および関係者（家族・相談支援専門員・障害児者施設関係者・民生児童委員等）に対して、口腔疾患の予防や口腔機能の発達・維持向上について情報提供を行う必要があります。

6. 全てのライフステージ

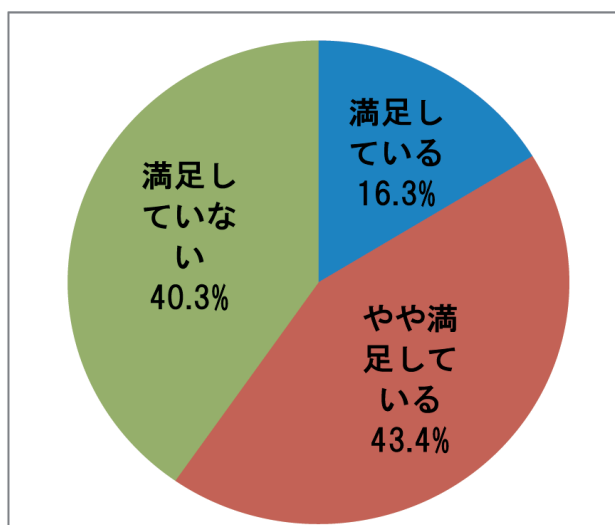
(1) 現在の取り組み

- 【歯科疾患の予防、口腔機能の発達・維持・向上】
- ・各種講座、広報・ホームページ等による周知

(2) 現状

- 生活アンケート(H24)で口の状況に満足している(やや満足も含む)と答えた者は59.7%います。

歯や口の状態に満足している者の割合 (H24 生活アンケート)



- 歯や口の健康格差があります。
- 歯科保健に対する意識が低いです。

(3) 課題

- 歯や口の健康格差を縮める対策が必要です。
- 市民の歯科保健に対する意識の向上を図る必要があります。
- 災害時の歯科医療救護体制について、「災害時医療救護マニュアル検討委員会」とともに検討する必要があります。

